

なら燈花会能

とうかえのう

業平生誕千二百年

金春流

能社若



素囃子 袖神楽

独吟 雲林院 山中雅志
仕舞 井筒 金春飛翔
仕舞 小塩 金春徳高

シテ 佐藤 俊之

令和7年8月2日土曜日
13:30開始(12:30開場)
奈良春日野国際フォーラム 麓能楽ホール

入場料

前売 一般：6,000円 全席自由
当日 一般：6,500円
学生 前売当日共：2,000円

切符販売開始：
令和7年6月2日(月)

切符取扱

●奈良能事務局

Tel：0742(24)5171 (不在時留守電対応)

Mail：npohoujin.naranoh@gmail.com



●チケットぴあ：Pコード534570(要手数料)

購入方法URL <https://t.pia.jp/guide/retail.jsp>

●出演者(チケット販売のご協力者)

お能って何？

- バスタDE 能楽入門講座 -

令和7年 7/12(土) 10:00開始 9:45開場

奈良公園バスターミナル レクチャーホール

●能の講演と講演に伴う実演 ●能楽体験 全席自由

〈講師〉 金春流シテ方 佐藤俊之 前売・当日共に1,000円
観世流シテ方 山中雅志 8/2燈花会能入場券提示で
観世流大鼓方 森山泰幸 受講無料、当日会場で切符を
ご購入の方も無料

ご予約・お問い合わせ：左記の奈良能事務局まで
受講券購入：チケットぴあ Pコード：657027



【主催】NPO法人奈良能 【後援】奈良県 (一財)奈良県ビジュアルビューロー (公社)奈良市観光協会 奈良市文化振興補助事業(市民文化活動支援事業)

お問い合わせ：NPO法人奈良能 Tel:0742(24)5171 Mail:npohoujin.naranoh@gmail.com ◎当日来場者用駐車場はございません。

なら燈花会能

業平生誕千二百年

日令和七年八月二日土曜日
於奈良春日野国際フォーラム薨

能楽ホール

独吟 雲林院

山中 雅志

仕舞 井筒

金春 飛翔

中田 能光

小塩

金春 穂高

酒井 賢一

田中 直樹

講演「業平生誕千二百年」

山中 雅志

能 杜若

福王 知登

森山 泰幸
荒木 建作

上田 慎也
野口 亮

袖神楽
素囃子

湯本 哲明
松浦 良太

西俣 暢尚
中田 能光
田中 直樹
岩切 康宏
金春 穂高
金春 飛翔
吉川 恵宥

主催 奈良能

※事情により、演者を変更させて頂く場合がございます。

今回のなら燈花会能は業平生誕千二百年に際し、業平に因んだ演目をご覧いただきます。

■独吟 雲林院（うんりんいん） シテ（主人公）…在原業平（ありわらのなりひら）

在原業平は天皇の血縁として生まれましたが、政変により臣籍降下、在原姓となりました。美男で歌を詠む才に恵まれ、名作『伊勢物語』の主人公は業平とされています。番組ではまず、業平が主人公の『雲林院』を親世流の独吟でお聞きいただきます。能『雲林院』は京都紫野の寺、雲林院を舞台に、『伊勢物語』を愛する者と業平の霊が、和歌や物語について語り合うお話で、美しい詞章が散りばめられています。筋の異なる愛憎劇『雲林院（古形）』という能も存在します。機会があれば見比べてみてください。〆月やあらぬ 春や昔の春ならぬ わが身一つは もとの身にして…

■仕舞 井筒（いづつ） シテ（主人公）…紀有常ノ女

この文章背景の井桁の様な柄は「業平菱」と言われる文様です。能『井筒』は『伊勢物語』二十三段「筒井つの 井筒にかけしまろがたけ 過ぎにけらしな妹見ざるまに」から想を得たお話で、幼馴染の業平と有恒ノ女は成人したのち夫婦となりますが、時を経て二人の住んでいた屋敷跡は寂しい古寺になり、そこに業平の冠直衣を身に着けた業平の妻の霊が現れ、月夜に井戸に身を映し、業平をしのびます。奈良天理の在原神社には伝承の井筒の井戸が有りますが、今では高速道路の下となっています。〆筒いづつ 井筒に掛けし まろがたけ 生いにけらしな 老いにけるぞや…

■仕舞 小塩（おしお） シテ…在原業平（ありわらのなりひら）

奈良佐保路の不退寺は平城天皇の「萱の御所」跡に業平が建立した寺とされています。明治には荒れて無住の寺でしたが、昭和に整備され、毎年五月二十八日には業平忌の法要を営んでおられます。『伊勢物語』七十六段「大原や 小塩の山も今日こそは 神代のことも思ひいづらめ」「二條の后と業平の思いを歌ったとされています。能『小塩』のクセでは花盛りの春の宵、花車に乗った美男子の業平が現れ、伊勢物語の世界に舞い遊びます。美しい詞章と、上品な舞にそれぞれの業平を思い重ねてご覧ください。〆春日野の 若紫の すりごろも しのぶの乱れ 限り知られずと詠ぜしに…

■能 杜若（かきつばた） シテ…杜若の精 ワキ…旅僧

物語 都の僧が三河の国八橋で杜若を眺めていると一人の女が現れ、業平が「唐ころも 着つつ馴れにし妻しあれば はるばる来ぬる 旅をしぞ思う」と、「かきつばた」の五文字を歌の頭に置いて、遠く離れた妻を思う歌を詠んだ事を語ります。やがて女は業平の冠と、業平の恋人であった二条后高子の唐衣の姿で現れ、自らは杜若の精とあかし、業平は歌舞の菩薩と讃え、仏法を得た事を感謝して帰っていきます。〆色ばかりこそ 昔なりけれ 色ばかりこそ 昔男の名をとめし はなたちばなの 匂いうつる…

袖神楽（そでかぐら）／素囃子（しらばやし） 『杜若』ではこの二つの小書き（特殊演出）は一組で実施され、金春信高師により整理復元されました（「金春の能（上）」より）。この小書きが付くと、序ノ舞の「序」が長尺に、笛がアシライ笛く黄鐘調く盤渉調と変わり、キリの途中でイロエに、橋掛りで袖を冠って杜若を眺める型に、囃子に緩急が付き、最後は合掌ドメとなります。その分クリ・サシ・二段グセは省略します。この小書きが付くことで一段格が上がって荘厳さが加わり、より仏教に帰依する心が強調されます。

能楽堂でしか味わえない、一期一会の貴重な機会に、身を浸してください。〆すわや今こそ 草木國土 悉皆成仏の み法りをえてこそ かえりけれ